

Editor's eye

・特集・

アトピー性皮膚炎の 最新情報と新治療

編集担当 馬場 直子

アトピー性皮膚炎(atopic dermatitis: AD)治療では、プロトピック[®]軟膏以来の20年間新規治療薬はなく、もっぱらステロイド軟膏、プロトピック[®]軟膏、保湿薬による寛解導入とプロアクティブ療法による維持療法という標準治療が行われてきた。2018年にADの病態をひきおこしている主なサイトカインであるIL-4とIL-13を抑制する抗体製剤・デュピルマブが上梓されたのを皮切りに、AD治療は新時代を迎えた。その後、外用薬ではJAK阻害薬のデルゴシチニブ軟膏、PDE-4阻害薬のジファミラスト、内服薬ではJAK阻害薬のバリシチニブ、ウパダシチニブ、アプロシチニブの3製剤が次々と新登場し、痒みのIL-31受容体を抑制する抗体製剤ネモリズマブも承認された。本特集号は、最近急激に増えてきたAD治療の選択肢をいかに無駄なく、有効に使い分けていくかを考えるうえで役に立つ1冊にしたいと企画した。

「総説」では、ADにおける分子生物学的機構と各新規薬剤の作用機序、難治性の皮疹への効果などについて事例をあげながら解説していただいた。「治療」では外用、注射、内服の新規治療薬についてメリット、デメリット、特性を知ったうえでどのように使い分けるべきか、またこういった副作用に注意して使っていくかなどを詳しく解説していただいたので、実臨床における使い方のコツがよくわかる。「統計」では、新薬の中では治療経験が長いデュピルマブによる198例の治療効果、3年間の寛解維持の状況、それによって浮かびあがってきた問題点と今後の課題についてまとめられていて、非常に役立つ。また「Topics」では分子標的治療薬使用によって生じる免疫抑制に伴うさまざまな感染症、とくに問題となってきた水痘帯状疱疹ウイルス感染症の現状と対策について最新情報が書かれているのでぜひ一読していただきたい。

「臨床例」では、デルゴシチニブ軟膏、コムクロ[®]シャンプー(最近ADにも適用追加となっている)、デュピルマブ、バリシチニブ、ウパダシチニブなどが著効した例があげられているが、それぞれ特徴的な病型や状況であり興味深い。一方で、デュピルマブによると思われる乾癬様皮疹の報告もみられるため、今後注意してみていく必要がある。

AD治療において、ますます皮膚科医の手腕が問われる時代に入ったと思われる。